

予が出版事業

柳田 國男

予が出版事業

人を笑わせるつもりで私はこの見出しをつける。さて素人にしてふいと本を出して見たくなる者はいくらもあるが、私のは業と名づけてもよいほどに出版道楽が年久しく、また悔いるということを知らない。そうして世間ではあまり構いつけぬのだから、自伝を書く価値があると思う。もつとも西には正宗敦夫君という巨頭がいることは承知だが、彼は同時に印刷に興味をもち、職工もたいていは自分一人きりだったらしく、とにかくに虫眼鏡で見出すほどの工場は一つ持っていた。これに対して小

生は純なる Publisher であつた。おおよそこの名で呼ばれている人たちの味うべき夢と憂いと満足とはみな味っている。そのうえに年もやや多いからお先に失礼して談かたらせてもらう。

『竹馬余事』

小さな時から紙さえあれば帳面を綴じて、その上に標題をつけることが好きであつた。いらぬことばかり書いてあるので反故ほごになつてしまつたが、その中にたつた一

つ、五十年後になって発見せられたものがある。明治二十年の九月、東京へ遊学する間際にこしらえて残してきたもので、標題は亡父の筆だから、多分相談をしてつけたのかと思う。半紙半分の横綴五、六十枚のもので、竹馬奔走のかたわら書き溜めた文章や漢詩などが並べ載せてある。まもなく死んだらむろん限定出版ものだったろうが、幸いなことにその必要がなくてすんだ。しかし今になるとやっぱり棄てられない。天下一品の著者自筆本だからである。東京へ出てからもこの癖は止まなかつた。多くは表紙ばかりが本らしくて、中味は三分二以上も白

紙だったから、かえってそこいらに散って残っている。むろんいずれもみな永遠の「近刊」である。

『萩の古枝』

明治三十七年の戦役なかばに、田山花袋君と協力してこの本を出した。これはわれわれの歌道の師松浦萩坪先生の歌の集で、先生還暦の記念として門下一同に買わせたものである。部数はたしか五百で、その一部分が近年まで残っていた。この本ではうんと私は苦勞をした。体

裁組方等はほとんどみな自分の考案で、表紙の萩の絵は弟の松岡映丘に描かせ、序文は盲蛇に私一人で書いた。それを先生にも見せずに刷ってしまったといつて、後でうんと叱られ、また少しもほめられなかったことを憶おぼえている。しかし今取出して見ても、本の形などはけつして悪くない。ただどうしたわけか少しも古本街には顔を出さない。

この一年前の明治三十六年にも、私はなお『山路の菊』という本を出版している。これは外祖母の安東菊子の歌集で、同時に出費者もそのおばあ様であった。歌も格別

おもしろくないので、私はこれを自分の仕事の中には入
れていない。

『のちのかりことばのき後狩詞記』

この本は現在むやみに景気がいいが、実はまた私の著
書ではなく、日向の椎葉村の村長の口授を書写、それに
ある旧家の猟の伝書を添えて、やや長い序文だけを私が
書いたもの、出したのは明治四十一年の冬だが、当の作
者がまだ高齢で彼地に生きている。ただこの書を珍本に

した技術に至っては、あるいは私のものということがで
きるかもしれぬ。この年の五月の末に、私は東京を発し
て九州の南半を一巡し、広島までかえってきってから電命
でまた土佐へ渡り、百余日を累ねてへとへとに疲れて戻
って来た。そうして病床に就いて退屈な日を送っていた
際、気がついてみると旅費が二十何円かあまっている。
これであれを本にしてやれと思つて、積らせてみたところ
がちょうど五十部だけできるという。本に番号を打つ
ということはある頃としては大きな気取であった。終り
の数冊だけはつまらなく散らしたが、その他はことごと

く行先を控えて著者関係者、およびその当時自分の尊奉するかぎりの先輩へ、多くは手紙まで添えて拝呈したのであった。あんな百二十頁のちっぽけな本に、徳富、山路等の一流文士の批評が出て、そのときからすでに好事家に狙われていたのである。中に書いてある事実が当時としてはみな耳新らしく、そのうえに序文と頭註で、これは将来研究しなければならぬ問題だといひ、実際また少しずつ、われわれの学問もこれを明らかにする方へ向いて行ったので、次第に客観的にも重要になってきたのである。岩波といったような大出版者には経験のないこ

とだろうが、自分にはこの発行総数の半分までは所在がわかっている。中には二度三度主を替えて、まだ系統のたどられるものさえあるのである。しかも滑稽なことはこの書の題名を、正しく読んでくれた人も半分しかない。私は実は多賀豊後守の『狩詞記』を読んでいて、こういう名の本が出してみたくなったのである。この興味がなかったなら、あるいは出版はまだ延期せられたかもしれない。

『遠野物語』

是も精確には私の著書ということができない。再版になつてから便宜のために、著という語を掲げた者があるというのみである。少なくとも始めてこれを世に出したときに、私以上に満悦していた人があるのである。しかもこの人のうれしがるというほかに、私の心の中には出版者心理が働いていた。西南の生活を写した『後狩詞記』が出たからには、東北でもまた一つは出してよい。三百数十里を隔てた両地の人々に、互いに希風殊俗というものはないということ、心づかせたいというような望み

もあつた。幸いにこの比較研究法は、これが端緒となつてだんだんと発達している。それから今一つは前々年の経験、味をしめたといつては下品にも聴えるが、人にはこういう報告にも耳を傾ける能力があるということとは、あの時代としては一つの発見であつた。現にそれから後、急に美人や風景や名物の土産品以外に、若い人たちの知りたがる地方事実が増加したのである。この本の出版はたしかに企業であつた。信用はあつたけれども私に資本はなかつた。損をしたら填めようという内々の心構えをして、恐る恐る五十銭という定価をつけてみた。知友に頒わか

つのは二百部でも十分なのを思い切って三百五十刷らせてみた。印刷所の支配人が書店を兼ねていて、よく面倒をみてくれた。半歳ほどしてから番号順の購読者名簿と、三十何円かの現金を届けてくれる。これは何かと問うと『遠野物語』の純益だと答える。これは大成功と得意になつてみたものの、おかげで将来いつまでも素人本屋を続けなければならぬ運命をくくりつけられたわけである。

このついでに一言したいのは『石神問答』^{いしがみ}のことである。これも同じ親切な出版所の作業に成つたものだが、

こちらは全く向うの出版であった。ただ経験の少ない新店であつただけに、著者の注文はすべて受け入れられ、本の恰好から絵の入れ方、表紙は映丘に扉の文字は岡山君という書家に書かせるなど、いっさいが設計のとおりでまるでこちらの出版のようであつた。自分ならああはしないのにと思つた点はほんの一つしかない。広告もしたのだがこの本が一向に売れていない。しばらくしてから欲しいという人が多くなつたのに、どこを捜させても一冊もない。たしか千五百刷つたはずで、印を捺おしたのが九百だ。あとは印無しでよいから製本するようにとい

ってやると、やがて店の者がいいわけにきた。実はもう売れぬとあきらめて包紙に使った云々。なるほど引きの強い良い紙だったから、包装用にはもってこいだっただろう。

『郷土研究』

『遠野物語』の出た頃から、高木敏雄君と墾意になった。先生も金はないのだが、私の真似をして伝説集の自費出版をする。それから昂奮を経験して、今度は月刊雑

誌の計画を私にもちかけてきた。私はこれに答えて、いい仕事だがいずれ損をすることであろう。ともかくも自分として一年十二回分の印刷費だけを用意しよう。損が半分ですめばこれで二年、三分の二の回収が可能だったから三年だけ続けて、やめることにしようといって始めたのが大正二年、これが今でも多勢の人に読まれている『郷土研究』という雑誌で、郷土研究社という素人くさい出版屋はこのときにできたのである。ところが一年と二か月で高木君は気が変って退いてしまい、資金はまだ少し残っていた。意地も手伝って私が一人さきでこれを支えたの

だが、どうやら四年間は中でたった一月、御大札のあった月を休んだばかりで、発行日も一週間とおくれると、腹が立って睡られぬほど騒いだ。人には内々だったが官舎の二階で校正もすれば発送の宛名をさえ書いた。ときには原稿に手を入れて行数の勘定がしにくいので、大部分をわが手で書き写したこともある。天性が発行事務というものに向いていなかったら、いくら学問に熱心でもこんなことまではできなかつたろう。おかげで人の書いた報告まで自分の仕事のようになって、今でもどこに何があったかをよく覚えている。しかも評判があまりに高

く問題になりそうなので、口実を設けて中止することに
した。実は財政の方でもとつくに予算を超えて、かなり
心もとない状態に陥っていたのである。この雑誌は中間
十年ばかりを隔てて、五巻以下を再興しかかったことが
ある。それには全く自分は携たずさわらなかつたが、最初の
編輯方針がなお若干は踏襲せられており、いま取り出し
て見るとこれもともどもに懐なつかしく感じられる。

『甲寅こういん叢書』

『郷土研究』を出していた片手間に、私はまた一つの叢書を計画した。これは内閣の文庫を整理していて、はじめて気がついたことであつたが、ちようど三十七、八年の戦役を境目として、日本の出版文化は面貌を一変していたのである。何がこの大きな変革の原因かと考えると、まず書籍の広告費というものが、このごろから急に激増している。次にはいわゆる印税の制度、発行の部数に応じて著者の収入が累加するという組織が一般化してきた。この二つは関連しているかと思うが、とにかくに多

く売れる本が次第に著述を職業たらしめた。以前印刷費に菜大根と同じほどの口銭をかけて、たくさん並べていた小冊子というものが、徐々として影をひそめてしまった。五銭や八銭の新刊は、今のように何万と出る見込みはないのだから、とても宣伝費を背負う力がなく、したがってどんなくだらぬものでも体裁をつけ分量を大きくする。本がこのころからいちじるしく高くなり、同時に無名氏の論策や研究によって、世に認められようという機会は遮断せられた。今日は専門の雑誌があつてやや長い論文でも出してくれるが、そんなのはまだほとんど一

つもなかった。昔の和本でいうなら三巻か五巻、今の四百字原稿で百枚から百五十枚ほどの、ちようど頃合ころあいの新著というものが、よほどえらい人の書いたのでも、日の目を見ることができなくなっていた。単純なる自分は愚書の世に溢れている原因を、もっぱらここにあるごとくに解していたのである。ある日同僚の西園寺という貴公子に、慨然としてこの不満を洩すと、いたって容易に共鳴して援助を約してくれた。二、三日してから倶楽部仲間の赤星という実業家と相談したといって、両人の名前で相応な金額を届けてくれた。私の責任は忽ちにして重

いものになった。それで早速六人の友人を説きまわって、『甲寅叢書』というものの計画を立てた。甲寅はすなわち大正三年である。このときの檄文は私が突嗟の間に筆を執ったもので、今日では人に読まれても顔を赤めるほどの高調子なものだったが、本の後に麗々と載っているのだから致し方がない。発起人は参加の順序でいうと三浦、新村、長谷川、石橋、他の二人はもう故人になっている。

何よりも大切な原則は自薦の原稿を警戒すること、しかもじっとしては、あっても知ることができないの

で、自分が主とし馳けまわって、よい著述を持つ人を見つけて勸説し、それをまた同人に告げて承認してもらった。自分等ばかりは何でも最も力のこもったものをつづつ、出そうということまで約束したのだが、さてそれがなかなか出てこない。はじめは催促し中ごろはやや様子をかがいがい、終りにはまた厳しく談じたのだが、結局誰も書かぬので少しうんざりした。第六編の『王朝時代の陰陽道』などは、今日は大へん人望ある好著となつてゐるが、実は原則をゆるめて頼まれて遺稿を出すことにしたのである。『山島民譚集』だけは卷二以下もちやん

とできていたのだが、自分のものを出すのはいさぎよくないからさし控えた。さし控えてよいことをしたと思っている。要するにこの元気のよい企ては頓挫したのである。今時珍らしい話だが金だけがあまって、それを使ってくれる人がなくて私は大いに弱ったのである。

さて此話も案外に長くなって、十枚ばかりという約束をこれだけでもう越えてしまった。この先まだちよつと珍らしい話があるのだがまた頼まれた時迄取っておくでしょう。

日本文学電子図書館

予が出版事業

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：「現代日本思想大系29 柳田国男」
筑摩書房

1965年 7月20日 初版第 1刷発行

1973年11月20日 初版第12刷発行

日本文学電子図書館